

## エッセイ：私の第二母国語「フランス語奮闘記」

### Essai : “Le français est ma deuxième langue maternelle”

木下 恵美子

KINOSHITA Emiko

---

**Abstract** : Lorsque j'ai commencé à travailler à Bruxelles, en Belgique, je n'avais aucune notion de la langue française. J'étais professeur à l'Ecole Japonaise, créée par le gouvernement japonais en 1979. Pendant trois ans j'ai appris les bases du français avec un belge. Je me suis installée ensuite dans le nord de la France. J'ai surtout travaillé à Paris en tant qu'animatrice dans l'hôtellerie et la restauration pour l'accueil de la clientèle japonaise. Puis j'ai quitté le nord pour vivre sur la Côte d'Azur et finalement à Monaco. J'ai eu la chance de rencontrer beaucoup de personnes très intéressantes et j'ai eu, de ce fait, une vie extraordinaire. Mon français s'est très vite amélioré. Il est évident qu'avec le temps, avec les expériences vécues dans cette nouvelle vie en France, le Japon mon pays natal, s'éloignait de plus en plus surtout la langue et la mentalité. Je découvrais cette façon de vivre tellement différente dans presque tous les domaines. Je n'ai pas eu de grands problèmes à m'adapter. Aujourd'hui je peux dire que le français restera toujours, pour moi, ma deuxième langue maternelle.

---

**Keywords** : La langue française, À la française, Bonsoir, L'amour, La mort, Mon trésor, Mon chéri, Oui, Non, Merci, Pourboire, À bientôt, フランス語、フランス風、ボンソワール、ラムール、ラモール、モン トレゾール、モン シェリー、ウィ、ノン、メルシー、プールボワール、アビアントー

---

フランス暮らしに馴染んで、さほど違和感なく現地の人達ともうまくやっていける様になったのは、私がフランス語で話すことに自信を持てるまでにたどり着いた頃からである。話す時のしぐさや感情表現も、すっかり「à la française」(フランス風)。それが効を成したのか多くの友達に恵まれ、自国の言葉にこだわり深く、誇りを持っている彼らから多くのことを習得した。

世界が英語にのっとられそうなお時世を承知の上で、観光客などの外国人にトリコロール(三色青・白・赤)の国旗をちらつかせ、決してその座を譲らないという頑固なフランス人の存在感は重い。

自分の話していることに酔いしれる。いや、「Theâtre」(テアートル、舞台劇)の主人公に

なり切って、とうとうと述べまくる。聞き手もいつの間にか相手のペースに引き込まれ、なるほどと納得させられる。

言葉の持つ魔術というか不思議というか。私の体験からフランス語の魅力について紹介してみたい。

その頃、私は Paris (パリ) より北の Lille (リール) という都市に住んでいた。この辺りには視界一面の平地にジャガイモ畑が広がっている。

ある日、ラジオを聞いていると、その「ジャガイモ」について語る長時間番組に出会った。

「Pomme de terre」(ポーム ド テール、ジャガイモ) は土のりんごと訳せるが、そのいわれ、食されるようになった過程、料理法、産地などありとあらゆる情報を、まるで美しい音楽を聞かせるごとく話し続けている。そして、最後は何人かでの「じゃがいも談義」で結末となった。話し手の表現の豊かさで番組は盛り上がった。フランス語の奥にひそむ生活や文化が伝わってきて興味が持てる。

何とその後、この放送局から私に番組出演依頼が舞い込んだ。と言ってもそれ程大げさな事ではなく、インタビューの様なもので、日本人女性から見たフランス人男性観を語ってほしいとのこと。

何とか私のフランス語で自分の思いが充分表現出来るかといささか心配はしたけれど、聞き手の話術に助けられ、それ程苦勞なく応じることが出来た。当時 (1980 年代の初め頃)、リールに住む日本人は数える程しか居なかった。結構あちこちから声がかかって専門学校や企業などにも出かけて、日本に関する授業などを担当していた。そのおかげでフランス語上達の道が開けたと言っても良い。

実は私が最初にフランス語を勉強したのは、リールから国境までさほど遠くないベルギーのブリュッセルであった。第二の公用語としてフラマン語も幅をきかせているこの国では、やや訛りのあるフランス語が話されていて、それに聞きなれていたせいか、渡仏してから少々戸惑うこともあった。相手は分かっているだろうという前提のもとにしゃべりまくるので、話の内容を自分の想像でおぎなう力が身についた。場合によっては笑ってごまかすのは大変失礼になるので、分かったふりをするのは禁物。もう一度聞き返す方が賢明と言える。

30 年来、いや、もっと長いかも知れない。ずっと親しくしている Jean-Claude (ジョン・クロウド) は高校のフランス語の教師であった。70 代の今は教職から離れ、悠々自適の暮らしを奥さんの Anne-Marie (アンヌ・マリー) と楽しんでいる。彼ら夫妻は私が担当していた、カヌヌ市民大学の日本語講座の熱心な生徒であった。日本が好きで来日回数は何度になるか。ジョン・クロウドは私のフランス語を時々ほめてくれ、それが意欲へのアクセルにもつながった。ありがたい。

ある日、日本語の授業が終わると「こんばんは」と彼が帰りの挨拶をした。「さようなら」と言わなかったのは、フランス語では「**Bonsoir**」(ボンソワール、こんばんは)が別れの挨拶にもなっているからだ。そうか。やはり、国語の先生でもまず、自国の言葉で考えそれを日本語に訳しているのだと感じた。もうひとつ。彼らが来日した時、カフェかどこかでお湯を頼むとき、「熱い水お願いします」と言って笑われたとのこと。「**L'eau chaude**」(ローショド)、確かにこれを訳すと「熱い水」になる。

こんなエピソードを聞くと、私にも似たような体験がよみがえってくる。フランス語は発音が上手に出来ないとこちらの意志が伝わりにくいことが多い。私は専門学校や高校などでも日本文化などについて授業をしていた。

ある日、「日本人の愛」について語ろうとした。「**L'amour**」(ラムール、愛)と言ったはずなのに、彼らには「**La mort**」(ラモール、死)と聞こえたらしい。幸い、それに気づいた女性が「死ぬほど愛するという話なのね」と私をかばってくれた。もっと発音に注意をしなければと、これをきっかけに私のフランス語征服への情熱はますます高まった。

私の親しいモナコ人夫婦は結婚 50 年の金婚式に、市役所からお祝いのメッセージをいただいた。その記念の食事会に私も同席した。半世紀もの間、自分達に変わらず続いていることがあると招待者を前に語った。**Robert** (ロベール) は妻の **Hélène** (エレンヌ) を「**mon trésor**」(モントレゾール、ボクの宝物)、奥さんは「**mon chéri**」(モン シェリー、私のシェリー)と呼び合っている。機嫌が悪い時でもいつも同じということ。確かに愛称でお互いを呼び合うのは夫婦に限ったことではない。恋人同志、あるいは親が子供になど。時にはユニークな呼び方で親しみが一層増すと言う感じがする。「**Mon cœur**」(モン クール、私のハート)、「**Mon amour**」(モナムール、私の愛する人)、「**Ma puce**」(マ ピュス、私のチビちゃん)、「**Ma poupée**」(マ プペ、私の人形)、などたくさんある。「**Petit oiseau des îles**」(島の小鳥)とか、「**Mon pain d'épice**」(私のスパイス入りパン)と呼び合っているのを聞いた時は驚いた、何と創造性豊かなフランス人なのだろうと。どんなに年を重ねても、何かしゃれた愛称でお互いをいたわり合う気持ちがすばらしい。

ある夏の日、マルセイユの日本総領事館での夕食会に招かれた。現地で教育関係の仕事に携わっている日本人間の情報交換などを兼ねての会であった。

当然のことながら仏日協会会長の **Beamier** (ボーミエさん) も一緒であった。彼は **Marseille** (マルセイユ) に生まれ育った。この辺りは訛りのある独特な話し方をするので、時には分かりにくいこともある。その上、体全体を表現の手段とし手ぶり身振りがかなり大げさである。

私の隣に座ったボーミエさんは総領事に協会の活動状況などを話していた。長い腕を上下左右に動かしやや興奮気味。それが高じたのか目の前にあったワインボトルに手が触れ、私の方

に赤ワインが流れ出した。しかも夕食のメインとしてかなり銘柄のある年代物。それが、私の着ていた白い上着にしっかりシミついてもう取り返しがつかない。接待をして下さっていた方が飛んできて始末をしたが、ワインは洋服に吸収されてしまった。

しかし、こんな時でもフランス人はあわてない。「何ておいしいワインなんだろう。知らない間に私が全部いただいてしまった。他の人には悪い事をしてしまった」と空になったボトルを持ち上げてユーモアで危機を逃れる見事な言葉の技。

きっと日本人の奥さんを口説いた時も、この言葉の魅力で彼の思いを伝えたのだろう。

フランス人と話していると、結構相手に対する気遣い表現に出合う。それでも、**Oui**（ウイ、はい）か **Non**（ノン、いいえ）のはっきりした意志はその中に間違いなく含んでいる。日本人の様な曖昧さは謙虚の美德としては受け取られない。

例えば、週末に夕食の招待を受けたが先約があり都合が悪い。断るのは悪いし、折角だから何とかしたいと思いをめぐらす。すると、相手はすぐにこちらの様子を察して、「**Si tu ne peux pas venir, ce n'est pas grave**」(来れなかったら良いのよ。気にしないで)と言ってくれる。「**Oui, mais**」(うーん。でも・・・)と相手の気分をこわさない様にと優柔不断になる。これが却って良くない。思いっきり「**Je suis prise**」(ジュスイ プリーズ、先約がある)と伝えれば話は簡単なのに。こんな時、特別に言い訳やあやまりの言葉などいらない。

「**A la prochaine**」(アラプロシエンヌ、次回に)、「**Merci**」(メルシー、ありがとう)とそれですっきり気持ちに通じる。

親しくしている友人の **Michel** (ミシェル) からよく夕食の招待を受けた。

彼によると「**Un bon repas sans vin est un repas sans âme.**」(おいしい料理でもワインなしでは魂の抜けた食事になる)という事で、自分のワインコレクションの中からとっておきの銘柄を既に選んでであると誇らしげにボトルを見せてくれる。

確かに、料理の味を引き立たせるし、グラス片手に通の様な顔をしてたしなむと、私のフランス人の仲間入りも本格的だ。話ははずむ。そして、いつもの様に、食卓を囲む人達の中に必ず「**Plaisanterie**」(冗談)をさりげなく語り、皆を笑いの渦に巻く人が居る。

この日は主賓のミシェル。彼の演技力もすばらしく、まるで若い女の子になりきっている。

～**Une jeune fille se plaint à son amie** : (若い女の子が友人にこぼす)～

- **A tous nos rendez-vous, il m'offre des fleurs fanées.** (なぜか、彼は会うたびに私に枯れた花をプレゼントしてくれるの)
- **Eh bien, essaye d'arriver à l'heure ...** (それなら、次からはあなたがちゃんと約束の時間通りに行く様にしたら)

これがテーブルを囲んだ人達の話題に花を添え、結婚前の自分達のエピソード告白にまで至る。ふつうはあまり、プライベートな事を話すのを好まないフランス人だが、こんな時は何か心が打ちとけてくる。ユーモアを上手に解することの大切さをつくづく感じさせられた。

ミシェルは実に気遣いの細かい人で、私にフランス語のユニークな「expressions」(表現)などについて、説明をしてくれる。時には理屈っぽいこともあるが、もっと私の表現力をふくらませたいという心配りが感じられ、感謝している。持つべきものは良き友である。

南仏の Grasse (グラス) という香水の町からさらに、10 km ぐらい登った所の田舎家で暮らしていた時のこと。その村の広場に面した Café (カフェ) に朝市の帰りによく寄りかかっていた。まさに、地元の人達との触れ合いは一杯のコーヒーから始まる。村の人々のいささか訛りのある話し方にも、プロヴァンス風な味わいがある心地良い。

話題はサッカーの試合や「le Tour de France」(ツールドフランス)の結果など。新聞記事を広げ、話は尽きない。しかし、彼らの会話の中には「Les mots d'argot」(仲間同志で使う俗語)がしばしば聞かれ、時にはうまく言っていることがつかめない。「flic ! flic ! (policier)」(警察官)と「fric (argent)」(お金)は意味が違うのに同じように耳に入ってくると少々迷ってしまう。「Quand j'ai gagné le Loto, j'étais vraiment saucé」(宝くじに当たった時、本当に嬉しかったよ)。「saucé」(ソーセ)は「content」(コントン、嬉しい)の俗語だが、私にとっては saucé が何か料理の言葉「ソース」に聞こえてしっくりしなかった。

こんなこだわりを感じる様になった自分もフランス語にだいぶ慣れたのだと自負したい気持ちになった。

寒い時、フランス人は「Café」(カフェ)に入り、コーヒーを一杯飲んで体を暖めると言う。コーヒーが終わると、コインをテーブルに残す。勿論、「pourboire」(プールボワール、チップ)も含めて。この言葉は「pour」(～のため)、「boire」(飲む)という二つの単語が一緒になった。つまり、チップは飲むため(生活のため)の心づけということである。

「Un pourboire est une somme d'argent ou une libéralité versée à une personne en remerciement d'un service ou de la qualité de celui-ci」(チップは受けたサービスのいかんによって、その気遣いに対するお礼の気持ちを表すもの)で、その場に応じてどの位の金額をあげるのかは結構やっかいなことだ。レストラン、ホテル、タクシー、トイレなどあらゆる所で小銭が必要になってくる。

何かで読んだことがあるが、フランス人はしまり屋なので、「l'addition」(ラディション、勘定)の 5%程度のチップをおくが、イギリス人は 7%と少し多めだそう。最近では、払う金額で充分という理由付けで、チップをあげない人も増えて全体の 16%もいるとか。そんな時のちょっとした言い訳のセリフとして、「merci je n'ai pas soif」(ありがとう。喉が渴いていないか

ら・・)とか、「vous prenez la carte bleue?」(ヴー プロネ カルト ブルー?、カードで払える?)などあるが、それをスマートに使うのにも勇気がいるようだ。でも、「gardez la monnaie」(ギャルデ ラ モネイ、小銭は取っておいて)と感謝の気持ちを伝える方がお互いに笑顔で「Merci!」(メルシー!、ありがとう)が言えると思う。

「Caricature」(カリカチュール、風刺画)の文章は強烈で、筆者の思想の正当性を主張する勇気には言葉のみではなく、国民性の内部を見せつけられるようだ。徹底した表現の自由を通ず。

あまり深入りしたくはないが、2015年のパリでのテロ事件の標的となった「Charlie Hebdo」(週刊新聞「シャルリ・エブド」)のことを考えると、まさに言語が恐怖と混乱に社会を陥れる。それはフランス語に限ったことではないが、受け取る側の判断にも大いに問題があるはずだ。

話が色々とんでまとまりがなくなってしまったが、私のフランス語体験エピソードはまだたくさんある。

私なりに見つけたフランス人が好んで使う表現をいくつかあげて、今回のエッセイを終わりにしたい。

—Je ne sais pas (ジュヌセパ、「知らないね」市役所などの公共機関に書類の手続きなどに行き、こちらの質問に対し返ってくる言葉。冷たい感じがするが・・・)

—Je pense mais・・・(ジュポンス、メ・・・「私もそう思う。だけど・・・」一応相手の言っている事に納得した様に見えるがその後の持論が長い。結局は違う意見を言っている)

—C'est pas vrais (セパ ヴレ、「まさか、本当じゃないでしょう」しばしば相手の言っていることを疑っている感じ)

—C'est cher! (セ シェール、「高いよ!」節約家のフランス人は物価に対して敏感、何でも高いと言いたい様だ)

—On verra bien (オンヴェラビアン「どうなるか」何か結論を出しにくい時、先に返事を延ばす感じでよく使う)

—Ça marche! (サ マルシュ、「良いよ、OK」と言っても物事はこちらの思う様にはかどらないことが多い)

—Ça y est! (サイエー、「やったあー」感情表現豊かな彼らは喜怒哀楽を言葉ではっきり表す)

では、この続きはまたいつか。À bientôt! (アビアント!)

(2017年2月受領)